

主な消化器疾患について

逆流性食道炎

逆流性食道炎とはその名前の如く“胃酸が食道に逆流して炎症を生じる”病気です。症状として吐き気・胸やけ、のどのすっぱい感じなどがあります。原因として食道裂孔ヘルニア（食道と胃の締りが悪くなり、胃酸の逆流防止機能が低下する状態）、胃酸が多く出てしまう、肥満での胃に圧力がかかることなどです。胃カメラにて状態確認ができます。また治療としては生活習慣の改善（肥満の解消、食事後の数時間の臥床防止）や内服（胃酸を抑える薬や胃腸の働きをよくする薬）にて改善が見込まれます。

胃炎・胃潰瘍、十二指腸炎・十二指腸潰瘍

症状としては腹痛や吐き気、また重症では吐血や黒色便などを生じます。これはさまざまな原因によって生じます。暴飲・暴食やストレス、鎮痛剤、ピロリ菌感染やステロイド薬などです。胃カメラにて状態観察が可能です。また状態に応じて内服薬で治療可能であります。

潰瘍性大腸炎

症状としては便に血液が混じる（粘血便）、また微熱や腹痛などを生じます。こ

の原因は現在も不明であり難病性疾患とされております。年齢は主に若年者（20—30才）が多いですが、高齢者でもみられます。採血や大腸カメラにて状態確認が可能です。また長期の潰瘍性大腸炎の罹患者では大腸癌の発生が危惧されます。

過敏性腸症候群

腹痛、下痢、便秘などの症状が持続します。しかし採血や内視鏡検査で異常は見られません。また排便によって症状が軽減するのが特徴です。ストレスなどが原因といわれております。しかし他の病気（炎症性腸疾患や癌など）の除外が必要です。

急性・慢性肝炎、肝硬変

肝臓は沈黙の臓器といわれ、かなり状態悪化するまで症状が出ないといわれています。急性肝炎の症状としてはだるさ、尿が紅茶の色に近い、また便が白っぽい、皮膚や目の周りが黄色いなどがあげられます。急性肝炎の原因はA～E型のウイルス性肝炎、他のウイルス、アルコール多飲、自己免疫性、薬剤性などさまざまです。問診、視診、採血、腹部超音波などで判断します。重症となると生命の危機になるため、早めの受診が必要です。慢性肝炎は症状として体力低下、易疲労感などありますが、症状が出ない方もいます。しかし肝硬変まで進行すると

むくみや、おなかの膨満感、黄疸（皮膚が黄色となる）などが出現します。また慢性肝炎が進行して肝硬変（肝臓が固くなった状態）にまでなると、完治は難しいため肝炎の状態での早期発見、早期治療が重要となります。

膵炎・膵癌

症状としておなかや背中痛みや不快感があります。膵炎の原因としてアルコール、外傷、胆管結石、膵臓や胆道奇形、高脂血症などがありますが、原因不明のことも10%程度あります。膵炎の治療は原因にもよりますが、禁酒、低脂肪食、また内服加療などですが、医療機関に入院して治療される場合が多いです。膵癌の症状は膵炎と似ており、おなかや背中痛みや不快感ですが、体重減少や黄疸、糖尿病の急激な悪化にて見つかることがあります。いずれも採血、腹部超音波、CT・MRIなどの検査が有用です。

進行胃がん・進行大腸がんなど

症状としては進行胃がんの場合、食欲不振、体重減少、吐き気などがあります。進行大腸がんの場合は便の狭小化、血便などがあります。いずれも胃カメラ、大腸カメラが有用な検査ですが、状態によっては検査自体にリスクが伴うため、慎重な対応が必要な場合があります。

当院で可能な検査

採血

採尿便

潜血便

培養

腹部超音波

胃カメラ

大腸カメラ

レントゲン

内視鏡診療（胃カメラ、大腸カメラです）